

令和2年度中学校武道授業（柔道）指導法研究事業



令和2年度中学校武道授業（柔道）指導法研究事業〔主催＝日本武道館・全日本柔道連盟・日本武道協議会、後援＝スポーツ庁〕は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、令和3年2月20日・27日・3月6日の3日間、オンライン会議システムにより実施された。10月に実施する第12回全国中学校（教科）柔道指導者研修会に向けて、安全かつ効果的な指導内容、留意事項などを明確にすることを目的に、指導計画例の発表や研究協議が行われた。

■1日目（2月20日）

開講式では、はじめに中里壮也全日本柔道連盟専務理事が主催者挨拶に立ち、「コロナ禍により、WEB会議の開催となったが、皆様の日頃の研鑽の成果を共有していただくことにより、柔道界全体のレベルアップや発展につながると思うので、ご協力をお願いしたい」と述べた。

続いて、吉川英夫日本武道館理事・事務局長が挨拶し、「全国の中学生が武道を学ぶので、まずは安全で、楽しい授業を展開するために、現場で指導される先生方が分かりやすい指導法が提示されるよう、研究をお願いしたい」と述べた。



開講式終了後、田中裕之研究者による本研究事業の趣旨説明があった後、高橋健司研究者の司会で研究事業は進められた。今回は、第1学年次の単元指導計画例を9～12時間行うことを想定し、A：「投げ技」と「固め技」をまとまりとした指導計画例、B：「投げ技」を中心とした指導計画例、C：「固め技」を中心とした指導計画例の中から、7名の研究者が各々選択して作成した指導計画例を発表した。

▽水沢忍研究者（秋田県）＜Aパターン＞

初めて柔道に触れる生徒がほとんどなので、柔道に対する率直な感想を聞いた上で、2年生になってもまたやりたいと思ってもらえるよう、1時間目では柔道の特性や歴史の話をして興味を引き出したり、礼法について学習してもらう。投げ技の練習では、取は左手を離さない、受は左手で受け身を取るということを各自の役割として意識させることで、協力して取り組むようにしている。

▽前瀧大吾研究者（東京都）＜Cパターン＞

授業は、前半に受け身、中盤に固め技、最後に簡易試合で構成している。簡易試合では、4人1組となり、2人は抑え込みの攻防、1人は主審、1人はタブレットで撮影し、1回の攻防終了後に、動画で確認をしている。主審や撮影者から動きについてアドバイスを受けるなど、振返りの際に撮影した動画を活用している。

▽高品亮輔研究者（千葉県）＜Aパターン＞

生徒には、正確にできなくても「何となくこんな感じ」ということを意識させ、覚えてもらうことを第一に取り組んでいる。投げ技で崩すときの合言葉として「ヒット」と声に出し、釣り竿で魚が釣れたときのイメージをさせている。

3名の発表に対して、高橋健司研究者から「背負い投げについて肘のリスクをどの程度考えているか」といった質問や、田中研究者から「オノマトペ（擬音語・擬態語）を使った指導はとても良い」などの発言があった。最後に、高橋進研究者から「楽しさは自分の気持ちが満ち足りること、すなわち課題が解決していくことである。3人の研究者の発表は、分かる・できるから、人に伝えて人を楽しませるということにつなげていけるような、段階を踏んだ組み立てであった」と講評があった。

■2日目（2月27日）

▽三原史也研究者（和歌山県）＜Aパターン＞

運動量の確保を大切にしながら、寝技だけでなく、投げ技も取り入れた計画をしている。2時間目では、正しい姿勢が身に付いているか確認するため、ペアで姿勢を用いたゲームを取り入れている。また、安全に対するグループ学習として、実際に組んだ時どのようなところが危ないか、意見交換を行いながら、怪我防止についても学ばせている。

▽濱岡睦月研究者（島根県）＜Aパターン＞

2時間目の後ろ受け身では、畳をたたき音に喜ぶ生徒が多いので、段階的にボリュームを上げ、一体感を持たせる練習を心がけている。3時間目の崩しの練習では、コロナ対策として相手との身体的な距離を取ることを目的に「投げ技マイスター」と呼ばれる教具を実験的に使用している。

▽山根友樹研究者（山口県）＜Cパターン＞

3時間目に2人1組となり、受として四つん這いになる人と、取として受の腕を引っ張り上げる人で受け身の基本動作を学習させるが、その際、引手は命綱であることを理解させる。

固め技の習得のため、6時間目でオリジナルの抑え込み技を生徒自身が考え、発表することで、7時間目に行う基本となる抑え込み技の習得や逃れ方の研究につなげている。

▽長濱佳代子研究者（長崎県）＜Aパターン＞

抑え技の自由練習では、抑え込んだ際に、自ら「抑

え込み」と声に出させ、浸透を図っている。また、固め技の自由練習では、安全面の注意を行った上で、早い段階から自由練習を取り入れ、生徒に考えさせる授業を展開している。

4名の発表に対して「評価の観点（4観点）の重み付けはどのようになっているか」、「投げ技を固め技より先に行う意図はどこにあるか」などの質問があり、重要なことは指導法の工夫ではなく、指導手順であることを再確認し、2日目が終了した。

■3日目（3月6日）

2日目までの発表をさらに掘り下げるため、以下の5つの課題について7名の発表者の意見を聞いたのち、5名の研究者からアドバイスがあった。

①専門用語や内容の解説を「どの段階」で「どのように」指導、説明するか…「名称は必要なタイミングで教えれば良いと思う。大切なのは、なぜかということが説明できることである」（木村昌彦研究者）

②「投げ技」と「固め技」の指導順番と指導比率について……「運動能力を獲得するため、1年生のうちは寝技に重点を置いた方が目的が達成できるのではないか」（高橋進研究者）

③単独練習から相対練習へと発展させるときの効果的な指導例について……「相対的な動きは、相手と協力しながら2人で考えて行う際に有効である」（木村研究者）

④2人組や3人組、4人組以上で行う指導例のメリット、デメリットについて……「3人組や4人組になった際に、手を抜いたり、できない生徒が出るのが想定されるので、役割分担を明確にし、単純化することが大切である」（田中研究者）

⑤新学習指導要領の評価方法について、3観点の内容をどの場面でみとるか……「評価は細かくなって大変だと思うが、学校においても、ミスをした生徒を加点しないのではなく、部分的にできているところがあれば、多少のミスをしてでも加点をするような評価をしてほしい。そのことが柔道に対する興味や関心を惹きつけるのではないか」（向井幹博研究者）

3日間の総評として、木村研究者が「安全面に対する配慮や、狙いをしっかり持っていれば、そこからの発想は、工夫次第で色々な広がりができ、工夫している事例を集めて体系化していくと、さらに良いものができる。誰もがができる柔道授業を考えていきましょう」と締め括り、全日程を終了した。